

# バロリゼーションの政治経済学

江 頭 稔

## 目 次

- 一 語原と普及
- 二 経緯
- 三 理論的局面
- 四 政策的局面

## 一 語原と普及

英語の「バロリゼーション」Valorization という言葉は、ポルトガル語の「バロリザソン」valorização に由来し、「この新英語の使用は、（ブラジルにおける）一九〇六年のコーヒーのバロリザソンに起原するもので……コーヒー栽培者という一つの階級およびコーヒー栽培という一つの経済部門を救済するための政策であるばかりか、バロリザソンは経済変動過程を形成すると同時に、それまでの経済思想に大変革をもたらすものであった」<sup>①</sup>。

バロリゼーションの政治経済学（江 頭）

このような経済史的語原から出たパロリゼーションの通俗的あるいは普通名詞的用法は、「価格調節、価格のつり上げ」<sup>②</sup>とか、「（とくに、政府の人為的な）物価安定策、公定価格設定」<sup>③</sup>とかいった限定的意味合いにおいてである。ハロウエイ（Thomas H. Holloway）は、ブラジルで valorização という言葉が、一八九〇年代の後半における経済危機以来一般に使用されていたことを指摘し、さらに「一九〇三年八月、シシリアノ（Alexandre Siciliano）はパロリゼーション計画を提案したが、その原理は、一九〇六年に最終的に実施された政策の基礎となったものである」<sup>④</sup>と述べている。

ブラジルでは、一八八八年に奴隷制が廃止され、翌八九年に共和制が樹立されたが、フレイレ（Gilberto Freyre）によれば、「新共和国の一部指導者達が、今や急速な崩壊への道をたどる砂糖およびコーヒー貴族の衰えつつある勢力と接触した結果、ブラジルのコーヒー生産保護計画が台頭した。この計画は、経済学に対して、また当時きわめて漠然たるものであった、政府による市場統制の手法に対して、ポルトガル領アメリカが行なったもつとも独創的な寄与の一つである。……ブラジルがコーヒー統制のために一九〇六年に採用したパロリゼーションは、後にエクアドルがカカオについて、メキシコがヘニケン（竜舌蘭の一種）の統制について、英領マレーとセイロンがゴムについて、キューバが砂糖について、エジプトが綿花について、またイタリアがクエン酸石灰について採用した。……パロリゼーションは純国内市場向けの多数の商品についても適用され、そのよく知られた例はアメリカ合衆国の連邦農務局による小麦価格の引上げである」<sup>⑤</sup>というほど、広範な影響を与えた。

さらに、日本においても、政府がブラジル・コーヒーのパロリゼーションを研究し、一九二一年末、日本の主要輸出品であった生糸のパロリゼーションに関する法案を国会に提出した。それは、半民半官の会社を創設し、生糸過剰

の場合は買い上げ、不足の場合に放出して価格を調節し、相場の変動を防ぎ、農民の生活安定を意図せんとするものであった。<sup>⑥</sup>このように全世界的に普及したパロリゼーションは、「ケインズ以前のケインズ主義」<sup>⑦</sup>として、またトウネリ (Afonso de E. Taunay) によれば、当時フランスの経済学者で財政学者として有名だったポール・リュウ (Paulo Leroy Beaulieu) が、「ブラジルは文明世界全体にとって、もっとも興味深い実験を行った」と、評価したものであった。

## 二 経緯

一八世紀の第二・四半期頃ブラジルにもたらされたコーヒーは、一九世紀の初頭から商業的取引の対象となりはじめた。<sup>⑧</sup>コーヒー生産地帯は北から南へと移動し、一九世紀半ば過ぎにパイバ川流域から、コーヒー生産に適した赤紫色の「テーラ・ロッシャ」terra roxa と呼ばれる土壌が広がるサンパウロ州に至り、大発展を遂げる。一八二五年に世界のコーヒー生産量の二〇%を占めていたブラジルは、一八五〇年には四〇%、一八七五年には五〇%、さらに一八九〇年には五七%を占めるようになった。その間、世界の生産・消費量の増大とともに、生産地域別構成割合も変化した。すなわち、一八二五年にはブラジルを除くアメリカが三〇%、アジアおよびアフリカが五〇%であったものが、一八五〇年には、ブラジルを除くアメリカが二〇%、アジアおよびアフリカが四〇%、一八七五年にはブラジルを除くアメリカが二〇%、アジアおよびアフリカが三〇%、一八九〇年にはブラジルを除くアメリカが三二%、アジアおよびアフリカが一%と低下し、コーヒーはアメリカのほとんど独占的商品となり、また継続的に増大した世

界の消費（ヨーロッパとアメリカ合衆国）にすべて吸収された。一八九五年までは、天候に左右されるコーヒー生産に過不足が生じて、容易に調節され、實際上、世界のコーヒー市場に過剰が生じることはなかった。<sup>⑩</sup>

ブラード (Caio Prado Jr.) は、ブラジルのコーヒー生産の大発展について、「もちろんブラジルの、あるいはそれよりもいくつかの地域の自然条件——気候とか地質など——が、まずそれに大きく寄与した。しかし、一九世紀後半におけるブラジルのコーヒー農業のいちじるしい発展を可能にした決定的要因は、疑いもなく、必要な労働力を供給したヨーロッパ移民であった。……サンパウロ州——コーヒーの主要な大生産地域であり、新しい連邦共和制の確立によって自治権を獲得したが——政府は、移民問題をその活動の中心的計画とし、その問題を全く完全と思われる方法によって解決した。……サンパウロ州政府は、その努力と歳入の大半を不断に注ぎ込み、大成功をおさめ、みごとな成果を上げた。この州は、共和制発足以来一九三〇年までに二〇〇万以上の移民——その約半数が資金援助を受けた——を受入れ、そのほとんどがコーヒー栽培に向けられたのである」と述べている。このように、必要な労働力の供給が州政府によって主動され、コーヒーの大増産に成功したが、成功すればするほど、逆に過剰生産の危機を生み出すことになった。

一八八八年に奴隷制が廃止された理由の一つとして、グイマランセス (Alberto Passos Guimarães) は、移民自由労働に比較して、奴隷労働の生産性の低さが顕著になったためであることを指摘し、さらに、「自由労働の成果としてのコスト低下と、世界市場における異常な需要増加と価格上昇とが同時に起ったため、奴隷廃止の直後には、進歩的大農園主の収益が爆発的に増大し、また移民の導入が容易になったこともあって、新しいコーヒー樹の植付けが無秩序に拡大した。数年の間に、サンパウロ州のコーヒー樹数は、三倍に増大し、二〇世紀初頭の数年間に、生産と同

様に在庫も消費可能性をはるかに超過し、過剰生産の危機が現実のものとなった。この危機の特異性は、為替の切下げや大きな生産者や輸出業者への金融といったような、以前のメカニズムでは解決できるようなものではなかった<sup>⑫</sup>と、述べている。

一九〇一年に、サンパウロ州政府は、全世界のコーヒー生産能力がすでに消費需要よりはるかに超過して、またその超過の唯一ではないとしても主たる原因が、短期間に大増加したサンパウロ州のコーヒー植付けにあることを確認した。世界の消費を生産に比例した規模で増加させることは不可能であり、また生産を急激に減少させようとするればサンパウロ州の財産であるコーヒー樹の大部を伐採しなければならず、将来のために少くとも生産と消費とを均衡させ、またしたがって所得をえられるような価格を維持できるようにするための唯一の方法が、新しいコーヒー植付けの一時的禁止ということで、一九〇二年に実施された。<sup>⑬</sup>

コーヒー樹は評価できる収穫がえられるまでには平均五年を必要とし、サンパウロ州政府も、新しい植付けの禁止では、最初の五年間は何ら収穫の減退をもたらさないことを熟知していた。しかし、五年後からは、収穫の停滞と減退が始まり、消費傾向が今まで通りに増大すれば、過剰在庫も減少し、危機も回避できるものと期待された。にもかかわらず、需給条件は好転せず、植付禁止以前の一年から四年たった新しいコーヒー樹からの収穫が加わり、一八九七年以来蓄積された在庫は、一九〇六―七年に「緩衝在庫」buffer stock とみなされていた五百万袋の三倍以上の一千六百万袋に達した。これは年間世界コーヒー消費量にほぼ匹敵する大きさだった。<sup>⑭</sup>

一九〇六年二月、コーヒー生産州であるサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロおよびミナス・ゼライスの三州は、サンパウロ州の主導により、タウバテで協定を結び、「コーヒーの価値づけ」valorização do café を設定した。その骨

子について、フルタード（Celso Furtado）は、次のように述べている。<sup>⑮</sup>

(1) コーヒーの需給間の均衡を回復するため、政府は市場に介入し、余剰コーヒーを買付ける。(2) こうした買付けの資金は外国借款によって調達する。(3) この借款の利払いは、輸出コーヒー一袋ごとに「金」で徴収する新しい税金によって支出する。(4) より長期的な問題解決のため、コーヒー生産州政府は、植付けの拡大を抑制しなければならない。

しかし、この最初のバリゼーションは、「連邦政府の支持がえられず、サンパウロ州を中心とするコーヒー生産州によって実施に移されねばならなかった。連邦政府の抵抗に直面した州政府——共和制の地方分権によって輸出税を設定する憲法上の独占的権限が与えられた——は、国際的金融機関に直接資金を求め、計画を実施に移した」<sup>⑯</sup>。けれども、余剰コーヒー買付けのための資金調達は難航し、当初の意図とは違い、アメリカ、ドイツ、フランス、オランダおよびイギリスの銀行あるいは貿易業者よりなる「私的バリゼーション借款引受団」といったシンジケートとサンパウロ政府との協定によって、シンジケートが必要資金の八〇％、サンパウロ政府が残りの二〇％を支出し、シンジケートは一ポンド当たり平均七セントでコーヒーを買付ける。市場価格が七セント以上に上昇すればバリゼーションのための買付けは中止され、市場価格が七セント以下の時は、サンパウロ州政府は七セントとそれより低い自由市場価格との差額を、シンジケートに対して償還するというものだった。<sup>⑰</sup>

シンジケートのメンバーがコーヒー買付けに前払いしたものは、技術的には貸付けの形態で、それに対してサンパウロ州政府は年利六％を支払い、シンジケートはその保証として、バリゼーションのために買上げるすべてのコーヒーへの権利を獲得した。シンジケートのメンバーによって買上げられたコーヒーはサントス港からすみやかに積出

され、ヨーロッパおよび北アメリカの港にあるシンジケートのメンバーの倉庫に貯蔵された。サンパウロ州政府は、そのコーヒーの法的所有者であり、シンジケートのメンバーに対して、年間貯蔵コストと三%の取扱い手数料とを支払った。<sup>⑮</sup>

このようなバリゼーションが成功するための一つの鍵は、内密に操作することであった。というのも、自由市場における投機商人が、バリゼーションにどれだけ資金が使用されるか、あるいはシンジケートがコーヒー購入を中止するかを知られば、それに応じた投機をすることができるからである。しかしながら、内密の操作のために、シンジケートがどれだけのコーヒーを市場から引上げて処理したかを推定することは、現実には困難である。一九〇七年七月一四日、サンパウロ州知事は一九〇六―七年生産コーヒーの過剰が除去されたとして、もうこれ以上の買入れは行わないと宣言した。それまで、サンパウロ州政府と貿易商および銀行からなるシンジケートが買上げた良質のコーヒーは、およそ八一〇万袋に達し、世界年間生産量の約三分の一、ブラジル年間生産量の半分以上に達したものと、推定されている。<sup>⑯</sup>

「市場から余剰生産物を除去することは、バリゼーション政策の前半の操作を意味するにすぎない。その後、コーヒーは貯蔵され、採算がとれる価格で、市場を混乱させないように少量づつ目立たないように売らねばならない。すべてこのようなことには、相当の金額が必要である。バリゼーション・コーヒーの法的所有者としてのサンパウロ州政府は、貯蔵費、保険料および借款への利子支払いと同時に、その他の雑費を支払うべき責任があった。当時のある推計では、サンパウロ州政府は、これらの費用を支出するために、年々およそ三二万五千ポンドを必要としたといわれている。一九〇五年のサンパウロ州政府の総収入額は、二三〇万ポンド以下であったから、バリゼーション

ン・コーヒーが市場で過剰にならないようにするためには、収入のほとんど一・五倍を支払わねばならなかった」<sup>②〇</sup>。

サンパウロ州政府は、慢性的財政危機の状態にあったが、連邦政府の支援もうることができ、またイギリス、フランス、オランダおよびアメリカの貿易商、銀行によって一九〇八年に一五〇〇万ポンドの整理公債が引受けられたことによって、一九〇八年末に最終的に解決されることになった。しかし、そのために背負われた負担も大きかった。

〈第一には〉、サンパウロ政府は公債の支払義務を果しえなかったために、パロリゼーション・コーヒーの管理権を失うことになる。銀行はなお法的にはサンパウロ政府のものである大量の貯蔵コーヒーを、機宜をえて処分することによって、投資の回収を期待した。サンパウロ州政府が貯蔵費、保険料およびその他の維持費を支払うための収入を確実にえられるように、銀行はサントスから輸出されるコーヒーに対する付加税を、一袋当り三フランから五フランに引上げることが要求した。再びコーヒー生産者は、引上げられた付加税のおそらく大部分を支払った。それはパロリゼーション買上げがなされた唯一の期間であった一九〇六―七コーヒー生産年の価格支持によってえられた利益に対する支払いであったが、パロリゼーション買上げが終了した後もずっと支払い続けねばならなかった。<sup>②①</sup>

〈第二には〉、サンパウロ州政府は、公債が未払いである間は、委員会（貿易商代表四人、銀行代表二人、サンパウロ政府代表一人の七人より構成されている）の特別の許可なしでは、コーヒー取引に関するいかなる立法も制定できない。公債が未払いである限り、一九〇八―九コーヒー生産年には九〇〇万袋、一九〇九―一〇コーヒー生産年には九五〇万袋、また次のコーヒー生産年には一〇〇〇万袋を越えて輸出されるコーヒーについて、通常の九%の付加価値輸出税と付加税に加えて、罰則的二〇%の付加価値税を課することによって、年間輸出に上限が設けられた。このような規制は、コーヒー消費国に輸出される年間供給量を制限することによって、パロリゼーション在庫を処分



しやすくするものだった。<sup>22)</sup>

〈第三には〉、銀行がブラジル連邦政府に対して、サンパウロ州政府の整理公債を保証するように求めたことである。連邦議会内では賛否両論が戦わされたが、この連邦政府の保証は、最後のバック・アップという性質のもので、法案は一九〇八年一二月に議會を通過した。<sup>23)</sup>

以上のような整理公債引受けによって七人委員会は、およそ七〇〇万袋が処分されるまで、一九〇九—一〇コーヒー生産年に五〇万袋、一九一〇—一一コーヒー生産年に六〇万袋、一九一一—一二およびその後のコーヒー生産年には七〇万袋を販売する権限を与えられた。しかも、委員会は市場価格が五〇キロ当り四七フランを越えた場合には、いつでも追加量を販売することができた。——サンパウロ州政府がバリゼーション在庫を七人委員会に引渡した時から、コーヒー価格は上昇し始め、一九〇九年から一二年まで、ニューヨーク市場では卸売価格が急上昇を示し、続く一九一三年および一四年に低落した。「この卸売価格の動向は、第二のコーヒー・バリゼーションと呼びうるものであろう。というのも、この動向はその大部分が、委員会所有のコーヒーを、委員会が操作したことによるものだったからである。そのコーヒーが何時売られたか、どれだけの量であったか、また価格はいくらであったかを正確につかむことは不可能であるが、急激な価格騰貴は公共の批判を受けることになった」。<sup>24)</sup>一九一一年にアメリカ合衆国司法省は、カルテルや独占的行為を禁止した「シャーマン反トラスト法」Sherman Anti-Trust Act 侵犯容疑で、「コーヒー・トラスト」を調査し始め、かくて委員会メンバーの市場操作のいくつかが明らかになった。<sup>25)</sup>

歴史的にみれば、小麦の輸出入を規制した「穀物条例」Corn Laws あるいは生産者および輸業者への補助金付与といった以前の保護主義とは異なり、ブラジルにおけるコーヒーのバリゼーションは、植付けの制限と調整在庫

を組織する方策とを一体化し、「近代技術にもとづく価格支持が世界で最初に実施されたものであった」<sup>②⑤</sup>としても、試行錯誤の過程は避けられず、一九〇六年から二四年までの間に、三回のパロリゼーション（一九〇六年から一四年まで、一九一七年から二〇年まで、および一九二一年から二四年まで）が実施され、一九二四年かは「永続的防衛」*defesa permanente* に継承されていく。一九三〇年代の大恐慌以後、農業危機は新たな局面を迎え、その慢性化は避け難く、實際上すべての国のすべての生産物に及ぶものであった。この新しい局面では、農業の国家的保護が普遍的かつ永続的性格になってきた。<sup>②⑦</sup>

「国家的保護の歴史における奇妙なパラドックスとして、農産物原材料の欠乏および食糧品の世界的不足の年は、農業にとって豊かで平穏な時期で、あるいはもっと正確に言えば小農民が土地や資金をずっとよく与えられた時期である。これに反して、豊富であるか過剰生産の年は農業にとって全く災難の時期で、過剰部分はすべて国庫の大負担となった。一九三〇年代の過剰生産においては、農産物の需給を均衡させるため、新しい方式すなわち蓄積された過剰部分を大量に破壊することが導入された。この新しい方式の執行はどの国においても巨大な金額の公共支出を必要とした。アメリカ合衆国では六四〇万頭もの豚が犠牲にされ、また過剰小麦が機関車の罐で燃やされた。ブラジルでは一九三一年から四〇年までの間に、七八〇〇万袋のコーヒーが『焼却処分』*incineração* に付された」<sup>②⑧</sup>。この焼却処分は、年間世界消費量の三年分にも達しようかという膨大な数量であった。

### 三 理論的局面

まず、コーヒー商品の本質的特性から検討してみよう。ゾンバルト (Werner Sombart) は、『奢侈と資本主義』の中で、「一七世紀の初め頃から、砂糖のおかげでココア、コーヒーおよび茶がヨーロッパに輸入せられた。これらすべてはまず貴族社会とくに宮廷において好まれた。たとえばコーヒーは、ルイ一四世がトルコ王モハメッド四世の使節を閲見した時 (一六七〇年) にコーヒーを味わい、その後これを宮廷にとり入れてよりはじめにフランスに入ったのである。この嗜好品を中心として、公開のカフェーにおいては、新しい大都市的奢侈が行われるに至った」と、述べているが、大航海時代に起った商業革命では、取引される商品の量ばかりでなく、その質にも大変化が生じた。

というのも、自給自足を基本とした伝統的経済では、生活必需品の交換は限定的であり、また非経済的制約が強く、多面的、大量の商品化は、意図したとしても不可能だった。しかし、「商業革命は、ヨーロッパ各国の海港都市に新しい商人階級を勃興させ、その社会構造を変化させたばかりか、新奇な商品を大量にもちこむことによってヨーロッパ人の生活習慣を一変させ」、生活革命と呼ばれるようになった。遠隔地貿易による商品経済の発展は、主として必需品による伝統的域内交易とは違って、大部分は新奇な奢侈品の取引によるものであった。ヨーロッパの伝統的手工業製品といえども、それがアフリカやアメリカ大陸に持込まれれば、そこでは全く新奇な奢侈品となり、間違はなく生活革命を惹起した。

経済学において、嗜好品、奢侈品、必需品などを正確に定義し、批判に耐えられるような概念が形成されなかった

のは、それぞれの概念がきわめて相対的であり、また時代と社会とによって大きく変化してきたためであろう。人間進化の歴史は、「衣類を着るようになったサル」、「火を使い道具を作るサル」、あるいは「悪食のサル」<sup>③</sup>としてであり、決して必需品でなかったものを、良かれ悪しかれ、次々と必需品化した過程である。とりわけ、産業革命および産業革命以後の歴史は、それまで全く利用されていなかった珍しい特産品や新製品を、大量に必需品化してきたのである。コーヒーとその例外ではない。

けれども、交換価値が客観的に認識され、貨幣価値として具象化されるのとは逆に、使用価値は麻薬、タバコ、コーヒーなどについてみられたごとく、その評価が社会的に確定されるまでには相当の期間を必要とした。「生存必需品」でないとしても、「生活必需品」になったかどうかは、きわめて曖昧である。というのも、経済学ではただ単にある商品需要の所得・価格弾力性が大きい小さいかによって、便宜的に奢侈品であるとか、必需品であるとかいわれているにすぎないからである。

特定商品の使用価値は、人類普遍的使用価値を意味するものではなく、使用価値に関する限り、はなはだ社会・構造的である。アメリカ、フランスはイギリスよりコーヒーの消費量が大きく、イギリスは逆に茶の消費量が大きいといった消費構造の違いは、そのまま同一商品の使用価値が合理的でも客観的でもなく、まさに構造的に形成されていることを如実に示している。さらに、一九三〇年代以降アメリカに出現したベバリイジ（コーラ類）は、じょじょにコーヒーの消費構造を侵食したけれども、逆に一九五〇年代以降、工業製品としてのインスタント・コーヒーの出現は、原料としての低品質コーヒーの需要を大いに喚起し、全体としてのコーヒー需要に巻き返しがみられた。<sup>④</sup>

高価で新奇だった奢侈品も、高利潤によって生産・流通が活発化すれば、ますます安価になり、大衆的普及がさら

に刺激される。ブラジルのコーヒー生産が拡大したのも、このような累積的過程によるものであるが、高利潤期待による見込み生産は、とくに情報のフイード・バックが遅れがちな遠隔地向け商品生産においては、大量の過剰生産が発生しやすい。コーヒーのように、植付けから四、五年の「生産の懐妊期間」を必要とするものは、なおさら需給の自動調節が遅れる。そこで、消費者の「価格目安」行動と生産者の「価格目安」行動とを、それぞれ「需要の弾力性」と「生産の弾力性」とに代置して検討してみよう。

奢侈品としてのコーヒーが大衆に普及していった過程は、価格の低落と所得増加との複合によるものであったから、歴史的には一九世紀末頃までは、コーヒーの価格および所得に対する「需要の弾力性」はともに大きかった。世界的コーヒー消費が飽和状態に達するにしたがって、「需要の弾力性」は小さくなり、過剰生産の問題へ移行し、「生産の弾力性」に議論が集中する。バロリゼーションの直接の切っ掛けは、過剰生産による価格低落を如何に防ぐかということであつた。

農産物としてのコーヒーのもっとも特徴的なことは、生鮮食料品や穀物類と違い、相当長期の保存が可能である。これは、一九〇六年のバロリゼーションで買上げられたコーヒーの在庫残が、一九一八年に売られたこと、および「コーヒーの倉庫での貯蔵は、品質を悪化させる危険のない通常のやり方で、むしろ逆にある種の古いコーヒーは風味がよく、新しいコーヒーと混ぜればよい結果がえられる」<sup>34</sup>から、他の農産物に類をみないもので、またバッファ・ストックの成立を容易ならしめるものだった。したがって、需給の市場機構による調整は、「くもの巣の理論」cobweb theorem や「コーン・ホッグ循環」corn-hog cycle によって説明できるほど単純ではない。

ラモス (Augusto Ramos) は、バロリゼーションによって生じるかもしれない国際的生産者間競争について、「バロリゼーションの政治経済学 (江 頭)

ラジル・コーヒーの低価格を正常な価格にまで引上げことは、諸外国のコーヒー生産を刺激するものではない。というのも、諸外国によって供給されているコーヒーはブラジル・コーヒーとは違って、裕福な特定需要者に対するもので、ブラジル・コーヒーよりずっと生産費も高く、また常にずっと高い販売価格であり、それらの諸外国のコーヒー価格は、特定需要者との市場関係における需給によって、上昇したり下降したりするものである<sup>⑤</sup>と述べ、国際的生産間競争を否定しているが、「ブラジルにおけるコーヒー市場へのサンパウロ州政府の介入は、コーヒー生産組織の破壊、生産者の没落および外貨受取りの減少を防止するため、過剰生産危機に欠くべからざるもので、またその他の如何なるものによっても代替しえないものである<sup>⑥</sup>」から、絶対に必要であり、「しかもこのような介入は、ブラジルによってなされうるもので、まだブラジルだけが可能なものである。というのも、ブラジルは全世界で消費されるコーヒーのおよそ四分の三を生産しているからである<sup>⑦</sup>」と強調し、むしろ国際的生産者間競争を充分に意識していて、圧倒的セアーの強みによって可能なことを示唆しているから、品質や等級こそ違え、同一範疇の商品であることは否定すべくもない。

事実、パラシオス (Marco Palacios) は、ブラジルに次いで世界第二のコーヒー生産国になったコロンビアのコーヒーについて、「一九〇六年以後、ブラジル政府によって遂行された市場介入策は、コロンビアの生産を保護し、一九一〇年以後に生じた拡大を推進せしめる役割を果たした<sup>⑧</sup>」と、いう指摘からも明らかのように、長期の「生産の懐妊期間」と長期の「生産物の保存期間」が、需要の構造的変動を無視しても、「生産の弾力性」をいわば「価格目安」による短期のものとして取扱うには無理であることを示している。

現実の市場価格より、その市場価格によって想定された「非現実的期待価格」を目安とした生産者行動は、価格が

現実的であろうとなかろうと、「生産者希望価格」として「生産者希望生産」を実現する。生産者間競争の勝利の女神は、「希望価格」の実現であり、敗北の悲哀は「社会的供給法則」の冷酷さであり、「幻滅価格」の実現である。価格の低落を防止するための生産調整は、植付けの制限によって行われたが、天候不順、四、五年先の需要量、バッファ・ストック量の変動、国際的生産者間競争などなど不確定要因が多すぎる中で、全世界的コーヒー消費量に対する潜在的過剰生産量など予想することは不可能だから、まずは新しい植付けの制限によって対処しようということだった。

コーヒーの生産を制限しようという最初の政策は、サンパウロ州政府により一九〇二年に実施された。この政策は最初五年間、また後に五年間延長されたが、新しいコーヒー樹の植付けに対して課税することであった。けれども、「この政策が有効であったかどうかは、全く明らかでなく、またとりわけフロンティアにおける新しいコーヒー農園主達は、「反経済的および反自由主義的政策」だとして反対した。<sup>④</sup> また各州政府間の調整も、一九二四年以後の「永続的防衛」に至るまではまちまちで、サンパウロ州政府のバリゼーションは、パラナ州におけるコーヒー生産を拡大し、サンパウロ州のコーヒー生産者を誘致した。<sup>⑤</sup> 一般的過剰生産にもかかわらず、なおコーヒーの生産に向わしめた誘因は何だったろうか。

一八七〇年から八〇年にかけて全ヨーロッパおよび北アメリカで一般的農業危機が発生した。これは河川、陸上および海上交通の発達によって、新しい国から低価格の農産物が流入したことによるものであったから、その対応策として、農業の生産規模の拡大と生産性の向上が計られた。けれども、この危機はあらゆる経済部門に波及し、一八九六年まで続く最初の「大不況」となり、また資本主義発展の大変化をもたらすことになった。一八七〇年代に、資本

の国際化、最初のカルテルの形成、最初の価格協定および市場分割が行われた。自由競争は終りに近づき、独占的支配に代替された。一八八二年に石油トラストであるスタンダード石油会社が出現し、一八八四年には綿実油のトラスト、一八八五年には亜麻仁油のトラスト、一八八七年にはアルコール、砂糖および鉛のトラストがそれぞれ形成された。<sup>④①</sup>

このような世界情勢の中で、ブラジルのコーヒー生産過剰が直面した問題は、はなはだ矛盾した合理性とでもいべき方向へ発展せしめられた。先進国における農業危機が、合理化のための生産規模の拡大と生産性の向上とによって対処されたのに反し、植付け制限の不徹底さと相俟って、「生存経済には未利用ないし低利用の土地が、労働力以上に豊富に存在していた。事業家は単位面積当たりの資本投下量を最低にしつつ、この土地を利用しようとした。この土地が枯渇する兆候をみせると、事業家の見地からすれば、これを放棄し、収益性の高い新しい土地に資本を移した方がよかったのである」<sup>④②</sup>。

ブラジル国内における生産者間競争は、「新しい土地」を求める競争であるから、ある意味での生産規模拡大競争であった。しかし、資本と労働力が相対的に不足する中では、粗放的栽培方法が、「はるかに大きい資本単位当りの生産量を可能にした」<sup>④③</sup>けれども、国内的生産者間競争には勝てても、需要が飽和した国際的生産者間競争では決して有利に働かなくなった。

パロリゼーションによる価格保証は、「品質の良化を義務づけなかった結果、国際市場における価格と品質による競争力を弱め、市場を喪失したのみでなく、また結局は『残物供給者』<sup>④④</sup>として甘んじなければならなくせしめられたのであった」<sup>④⑤</sup>と、いわれているが、植付け制限による生産数量規制が充分でなく、また価格保証は品質の良し悪に関



係なく一定であるから、保証価格目当ての生産では、最低限ぎりぎりの品質を保つような生産者が有利となり、結果としてはブラジル・コーヒー全体の国際競争力を低下させるように作用した。「残物供給者」とは、いわば国際的限界生産者に他ならなかった。

ロビンソン (Joan Robinson) は、第三世界諸国における一次産品貿易について論じた中で、その商品価格について次のように述べている。——「ある国がその一次資源から得る輸出所得（誰が収入を享受するかは別として）は、この国が販売する特定商品の価格に大きく依存する。世界市場の好不況とともに、製造品価格と比べると、一次産品価格はより大きく上下する傾向がある。特定商品の一般的な価格水準は変動傾向をもち、同一商品を提供していても、それぞれの国では異なった結果が生まれることがある。特定時点における世界市場価格の動き方、時間をつうじての変化はきわめて複雑であり、これらについて一般的に論じることが、過度の単純化の過ちを犯すことになる。——商品価格の説明において、労働価値説を援用することは、単純化のためにしても、あまりたすけとはならない。生産物の質的差異が自然条件による場合には、生産物相互を純粋に価値、すなわち体化された労働、の次元で比べることはあまり有用ではない。われわれはこう言うことができる。『人間はどこでも同じだ。世界のどこでも一時間の仕事は一時間分の価値を創り出す』。しかし、これは道徳的言明であっても、分析的命題とはいえない。——全世界に妥当するような抽象的労働の一単位を定義しようと試みることはあまり意味をもたない」<sup>④</sup>。

国民経済学として樹立された経済学が、国際経済の発展に対応した基本原理をもっていないという不条理はともかく、資本主義の世界化あるいは国際的依存がなければ国民経済さえ維持できないという状況の進展に対して、カルテル、シンジケート、トラストあるいは市場分割といったような独占的、権力的要素が、自由主義によって発展して

きた経済活動の内部に胚胎した。——「ブラジル産品の輸出先の如何をとわず、この輸出貿易におけるイギリス人商社の支配的地位は誰の目にも明瞭であった。……イギリス人大商社の輸出港における支配的地位は、その商品取扱数量の比率がしめす以上に独占的な様相を帯びていたと考えてもすこしも誇張はない。……事実、一九世紀後半に発達しはじめの鉄道はもとより、海運業、輸出・入貿易業、保険業、銀行業などから資本取引を介して国家財政にいたるまでのほとんどすべての経済活動分野において、イギリス人の支配的地位は一時確固たるものがあつた」<sup>④7</sup>。

しかし、アメリカ合衆国およびヨーロッパの後発資本主義国がじょじょに強力になつてきた間隙をついて、サンパウロ州政府のパロリゼーションが実施された。それは経済への政治の挑戦であり、「純粹経済学」が確立しつつあつた時期に、まさに政治経済の相互不可分性、あるいは経済力と政治力との相互浸透性を、「政治経済学」の必要性和ともに、実証してみせようといふものだった。

#### 四 政策的局面

自由主義経済に内生してくるカルテル、シンジケートは、経済力を政治力あるいは権力へ転換しうることを証明したものであるが、逆に、保護主義的政策（政治権力による）が、経済力に転換しうることを証明したものがパロリゼーションに他ならなかった。「カルテルについての議論が有意義になるためには、政府による強制が伝統的カルテル概念とどの程度一致しうるものであるを検討すべきである。国際的分野においては、国内的分野におけるほど、強制的カルテルと自由カルテルとの区別が明瞭ではない」<sup>④8</sup>）としても、経済力すなわち売買力、資金調達力、市場統制力な

どに表現されるカルテル行為の有効性が、政治機構に由来するものであれ、経済的に自生したものであれ問題点となる。

このような意味で、イギリスを筆頭とするアメリカ合衆国、フランス、ドイツおよびオランダの国際資本に対抗し、サンパウロ州政府が挑戦したパロリゼーションは、明らかに一つの試金石であった。しかも、ただ単に国際資本の自由競争に対抗するといった経済政策以上に、流入した移民への生活安定といった社会政策も含まれていた。というのも、「コーヒー複合体」complexo cafeeiroとして形成されつつあった主要産業が、価格変動や労働組織の非近代性によって発展を阻まれ、前述したごとく州財政の大半を注ぎ込んでせっかく流入し続けていた移民も、一八九九—一九〇〇年において、また一九〇三—四年および一九〇七年において、流入数より流出数が上回るといふ事態<sup>④⑤</sup>さえみられたからである。

さらに、「商業投機は、一八九六年以降、コーヒー商業に介入しはじめた。それ以来、その投機操作がコーヒー経済の発展を大きく条件づけた。豊作は、価格を引下げる在庫形成のために利用され、その在庫は、不作の年に有利な条件で流出した。そして大農場主は、生産の諸費用を支払うため製品を直ちに売り渡さなければならず、中間利潤は結局、陰で活動する融資業者、あるいは国際銀行に結びついた仲買人にとられてしまった。……生産者たちは、このような状態から自衛しようとして、コーヒーの流通を維持し、安定させることを目的とする対策を要求し始めるようになった。その対策は、一九〇六年、事態が非常に悪化した折に、はじめて実施され始めた。ずっと以前から下落中だった価格は、いまや通貨の切り上げによって、あきらかに生産コストを下回る水準に落ちてしまった。コーヒー農業の損失は、非常なものであった。……生産者を保護し、かれらが、その生産物をあわてて供出せざるをえない状態

に置かないような金融組織があれば、すべては解決されたであらう。ところが、この解決策は、選択されなかった。価格の騰貴を強いるために、膨大な買い上げで市場に介入するという便宜的措施がとられた。表面に出ない利益関係者の操作が、投機的政策をもつ不安定な解決策をとり入れるのにどれほど寄与したかを今からたしかめるのは、きわめて困難である。しかしながら、生産者には全く無関係であった金融グループの儲けた莫大な利益は、われわれにもっともらしい想像を許すのである。生産者自身は、たとえ一時的にもせよ、疑う余地なく、恩恵を受けたのであるが、利益の大半は、かれらのもとへは行かなかったのである<sup>⑤</sup>。

複合的要因の相乗作用によって進行する歴史的経済現象から、その決定的要因を抽出することは困難であるが、いけば緊急避難の必要に迫られてか、最初は連邦政府の援助もえられず、サンパウロ州政府が強引に推進せしめたパロレゼーションの政策的効果については、様々な評価がなされてきた。——「一九世紀半ばまでに、とりわけジャワにおけるオランダ東インド会社を追いつき、ブラジルは世界の指導的コーヒー生産者になり、それ以来ずっと今日までコーヒー貿易における支配的立場を維持してきている。一八九〇年代の経済的繁栄は、ブラジルにおける大量のコーヒー植付けを生じ、その生産能力を二倍に引上げた。世界のコーヒー市場は大量の超過供給となり、価格は未曾有の最低水準にまで落込んだ。これにより、コーヒー市場を統制しようという最初の誘因が与えられ、集団的努力がなされ国際会議が召集されたが、何らの成果をうることもなく失敗に終わった。しかしながら、サンパウロ州政府は卒先して行動を起し、新しい植付けに一〇年の制限を課すとともに、市場から大量の買付けを行う『価格引上げ計画』 price valorization scheme を実施した。この計画の目的は、価格を引上げ安定化させることであり、過剰供給の時期を克服することに成功した。コーヒー経済の歴史では最初の過剰生産であったが、市場は均衡を取り戻し、第一次世界大

戦までの間、それ以上の混乱もなく作用し続けた」<sup>②</sup>。

これは、バリゼーションについて、概観的ながらその効果を高く評価したものである。ヘクスナー (Ervin Hex-ne) は、カルテルとは本質的に一時的なもので、「経験的にいって、カルテル関係はたいへん脆いものである。……この脆さは、カルテルの内部運営、アウトサイダーおよび買手に対する市場行動に反映されるものである」と、いった基本的観点に立って、一九〇六年のサンパウロ州政府によるバリゼーションを直接評価したものではないが、その後の経過から、次のように論じている。すなわち、

「協同行動の歴史において、コーヒーはむしろ顕著な役割を果たしてきた。ブラジルが行ったコーヒーの焼却およびその他の破壊的方法は、資本主義経済を阻止させる効果をもつ例として言及されてきたが、そのような解釈では問題の本質に迫ることはできない。第一次世界大戦から第二次世界大戦までの時期に、いくつかの政府によって市場を統制しようという試みがなされたが、いずれも不成功に終わっている。国際コーヒー市場ではんの部分的にであるが成功した例としては、第二次世界大戦以前にブラジル政府によってなされた試みであることだけは確かである。一九三一年の『国際コーヒー会議』 International Coffee Congress、一九三六年の最初の『汎アメリカ・コーヒー会議』 Pan-American Coffee Conference、および一九三七年の第二回の『汎アメリカ・コーヒー会議』のいずれもが、何らかの実際的成果を達成できなかったのである」<sup>③</sup>。

デルフィム・ネット (Antônio Delfim Netto) による『ブラジルのコーヒー問題』は、その書名にもかかわらず、すぐれて理論的かつ簡潔であり、一九〇六年のバリゼーションについて、大要次のごとき毀誉褒貶を与えている。<sup>④</sup>

—— (1) 本来の目的が果されたかどうかという点では、バリゼーション政策は、相当良い成果がえられたものと思わ

れる。というのも、一九〇三年より情勢がずっと悪化していたにもかかわらず、一九〇三年の国内価格より下落することを阻止できなかったからである。(b)パロリゼーション政策の副産物は、価格の激しい高騰であり、確かにパロリゼーションの目的ではなかったが、企業の期待とは逆で、阻止することもできず、また国の負債が激しく増加した。(c)サンパウロ州政府による植付け拡大への厳重な規制は、高価格での生産物輸出への統制とともに、競争拡大の例外的条件を創り出し、一九一九―二〇年の収獲は、その時まで四〇〇万袋前後であったものが、七五〇万袋以上へと増加した。(d)パロリゼーション政策は、特別の情勢の下では、特定の相当大きな資本が期待されうることを明らかにしたが、それは二つの方法で政策を容易にするものだった。その一つは、資金を供給したこと、もう一つは、消費者保護のためにパロリゼーション政策への反対行動を外国政府にさせなかったことである。

——他面では、外国資本の参加の条件として実現したものであるが、外国市場における大量のコーヒー在庫は、異常に費用を必要とした。というのも、(a)費用は外貨で支払わなければならなかったし、またすべての管理運営はたいへん高価だった。(b)購買者の眼と鼻の間で市場外の在庫を維持することは、確実な統計的情報がえにくいブラジル国内で在庫を維持するより、ずっと価格を低下させる傾向をもつ。(c)価格が上昇するにつれて、アメリカ合衆国、フランスおよびドイツに抗議行動が発生し、深刻な国際問題となった。

——一九〇六年のパロリゼーションについて、結論的評価を下せば、その目的とした点から考えれば、大ざっぱに言って良い成果がえられたといえるけれども、後にしばしば政府干渉の先例となったといわれるような、明らかに否定的貢献も果してきた。ともあれ、良い成果は次のような種々の理由によるものである。すなわち、(1)パロリゼーションが実施された時、すでにブラジルのコーヒー供給量は、当時の価格水準で吸収されうる消費量より多くはなくな

っていた。価格メカニズムは、「大投機」*enfiamiento* によって惹起された金融制度の互解に惑わされて、コーヒー園を大いに拡大していた農民をきびしく罰した。一九〇六―七年の収穫は当時の平均収量の二倍にも達する異常なものであったが、これは一連の偶然の出来事が重なり合ったため、多年にわたり霜害と旱魃が続きコーヒー園を疲弊させていたが、気候条件のもっともよい年には完全に回復していたからである。他面、一九〇二年にすでに始められていた植付けの制限は、少なくとも五、六年間はいして生産が増加しないことを保障した。したがって、唯一の問題は、過剰生産の処理ということであった。

——(2)パロリゼーション計画には、コーヒー取引に関係したほとんどすべての大資本が参加し、政策実施を容易ならしめた。一九〇六年のパロリゼーションは、そのほとんどが政府のために働く特定資本によって実行された「買占め」*corner* であった。信じられないほどの取引が行われたが、それは想像力と大胆さを用い、今世紀初めの商業を支配していた冒険資本の精神に、強く影響されたものであった。

——(3)これら特定資本の影響で、銀行グループはサンパウロ州政府を援助し、パロリゼーション政策を堅固なものにしたが、その私的人格は一層強調されていた。というのも、在庫コーヒーの管理は七人委員会によって行われ、その中の一人だけがサンパウロ州政府の代表であり、その他はアメリカ合衆国のコーヒー輸入部門の資本関係者とパロリゼーションに融資した銀行家であったからである。このことは、政策遂行の上で市場条件への調整を容易にし、価格高騰への反対を少なくした。それ以上に、このような組織形態は、経済的意図と避けがたい政治的紛糾とを大幅に分離せしめるのに役立った。とくに、後に「永続的防衛」におけるパロリゼーションでは、経済問題が政策意図に従属するようになり、経済システムを崩壊せしめるほど強力になった。

そうじて、パロリゼーションの評価は、短期的には成功したが、長期的には多くの問題点を残したことを指摘している。独占的組織とはいえカルテルの脆弱性は、その由来が私的なものであれ、政治機構によるものであれ、全く同じである。けれども、本来の意図は全く異なっている。パロリゼーションを一つの農業政策と考え、ハレット (Graham Hallett) の一般化した農業政策の目的と対照してみよう。——「過去における（農業政策の）一つの目的は、

農業就業人口を最大限に維持することであった。その理由は、農業人口は、戦時における勇猛果敢で絶対服従の歩兵の給源であり、かつ平時には社会の安定化を促進する信頼できる勢力とみなされたからであり、あるいはまた農村が都市よりも良好な生活条件を提供するものとみなされたからである。第二の目的は、しばしば、戦争の危険、または他の原因による輸入供給量の縮小、あるいは国際収支の困難のいずれかの理由によって、一定の食糧自給率を維持することであった。第三の目的は、先進国では最近最も重要なものになりつつあるものだが、農村の所得を維持し、農業生産および農産物流通の効率を高めることである」<sup>66</sup>。

一般論のもつ包括性と対比すれば、多かれ少なかれそのような目的が含まれていたといえるけれども、ブラジルのパロリゼーションは、政治権力をもって野放図な弱肉強食の自由競争経済へ挑戦し、まさに「農業政策」そのものを創造した画期的なものである。後進国だったとはいえ、「コーヒー複合体」を形成しつつあった主要産業の核心として——限定的にはコーヒー価格の低落防止にすぎない農業政策だったとしても——波及的、戦略的效果は計り知れないものがあつた。後に修正あるいは管理資本主義、または混合経済と呼ばれるようになる国民経済転換の嚆矢となつたものである。



注

- ① Santimburgo, João de, *O Café e o Desenvolvimento do Brasil*, Melhoramentos e Secretaria de Estado da Cultura, São Paulo, 1980, p. 111.
- ② 浜口乃二雄、佐野泰彦編『ホルトガル語小辞典』第四三版、大学書林、一九七九年。
- ③ 小稲義男他編『新英和大辞典』第五版、研究社、一九八〇年。
- ④ Holloway, Thomas H., *The Brazilian Coffee Valorization of 1906*, The Department of History, University of Wisconsin, Madison, Wisconsin, 1975, p. 37.
- ⑤ Freyre, Gilberto, *New World in the Tropics: The Culture of Modern Brazil*, New York, 1959. 松本幹雄訳『熱帯の新世界——ブラジル文化論の発見』新世界社、一九七九年、一五〇—一頁。
- ⑥ 堀部洋生『ブラジル・コーヒーの歴史』いなほ書房、一九八五年、二七四頁。
- ⑦ 大阪市立大学経済研究所編『現代世界経済と新興工業国』東京大学出版会、一九八三年、一五八頁。
- ⑧ Taunay, Afonso de E., *História do Café no Brasil*, Vol. 11, Departamento Nacional do Café, Rio de Janeiro, 1941, p. 190.
- ⑨ Amaral, Luis, *História Geral da Agricultura Brasileira*, Vol. III, Companhia Editora Nacional, São Paulo, pp. 53-4.
- ⑩ Simonsen, Roberto Cochrane, *Evolução Industrial do Brasil e Outros Estudos*, Editora Nacional e Editora da Universidade de São Paulo, São Paulo, 1973, p. 215.
- ⑪ Prado Jr., Caio, *História Econômica do Brasil*, 12 ed., 1970. 山田睦男訳『ブラジル経済史』新世界社、一九七二年、二九八—九頁。
- ⑫ Guimarães, Alberto Passos, *A Crise agrária*, 2 ed., Paz e Terra, Rio de Janeiro, 1982, p. 48.
- ⑬ Ramos, Augusto, *O Café no Brasil e no Estrangeiro*, Santa Helena, Rio de Janeiro, 1923, p. 528.
- ⑭ *ibid.*, pp. 528-9.
- ⑮ Furtado, Celso, *Formação Econômica do Brasil*, 1959. 水野一訳『ブラジル経済の形成と発展』新世界社、一九七一年、ハロリーゼンシヨンの政治経済学（江 頭）

二〇六七頁。

①⑨ 同右、二〇七八頁。

①⑦、①⑧ Holloway, op. cit., pp. 58-9.

①⑨、②⑩ ibid., pp. 63-6.

①②、②③ ibid., pp. 68-9.

②④、②⑤ ibid., pp. 69-71.

②⑥、②⑦ Guimarães, op. cit., p. 49.

②⑧ ibid., p. 52.

②⑨ Sombart, Werner, *Luxus und Kapitalismus*, 1912. 田中九一訳『奢侈と資本主義』而立社、一九二五年、一九六七頁。

③① 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』第二版、岩波書店、一九七九年、六六四頁。

③② ライアル・モトメン著、餌取章男訳『悪食のサル』河出書房新社、一九七四年。

③③ Duque, Hélio M., *A Luta pela Modernização da Economia Cafeteira*, Alfa-Omega, São Paulo, 1976, p. 79 ff.

③④ Delfim Netto, Antônio, *O Problema do Café no Brasil*, Superintendência de Planejamento do Ministério da Agricultura, Fundação Getúlio Vargas, Rio de Janeiro, 1979, p. 71.

③⑤ Lapa, José Robert do Armamar, *A Economia Cafeteira*, Brasileira, São Paulo, 1983, p. 101.

③⑥ Ramos, op. cit., p. 549.

③⑦ ibid., p. 548.

③⑧ Palacios, Marco, *Coffee in Colombia, 1850-1970*, Cambridge University Press, Cambridge, 1980, p. 230.

③⑨ Stolcke, Verena, *Cafecultura, Homens, Mulheres e Capital, 1850-1980*, Tradido por D. Bottmann e J. R. M. Filho, Brasileira, São Paulo, 1986, p. 59.

④① Cancian, Nadir Aparecida, *Cafecultura Paranaense, 1900-1970*, Grafipar, Curitiba, Paraná, 1981, p. 23 e p. 134.

④② Guimarães, op. cit., pp. 41-2.

④③ Furtado, op. cit. 水論誌、一、四四頁。

- ④③ 同右、同頁。
- ④④ 前掲、堀部『ブラジル・コーヒーの歴史』三四九頁には、次のような(注)がつけられている。すなわち、「輸入商は、まず消費者の嗜好に應ずるため良質廉価のものを購入し、それが終わってから比較的高価で品質の劣るものを購入する。つまり最後のものが『残物供給者』となるわけである」。
- ④⑤ 同右、三四九頁。
- ④⑥ Robinson, Joan, *Aspects of Development and Underdevelopment, 1979*. 西川潤訳『開発と低開発』岩波現代選書、一九八六年、九四頁。
- ④⑦ 毛利建三『自由貿易帝国主義』東京大学出版会、一九七八年、二六九—七〇頁。
- ④⑧ Hexner, Ervin, *International Cartels*, Sir Isaac Pitman and Sons, London, 1946, pp. 30-1.
- ④⑨ Beiguelman, Paula, *A Formação do Povo no Complexo Cafeteiro: Aspectos Politicos*, 2 ed., Pioneira, São Paulo, 1977, p. 89.
- ④⑩ Simonsen, R. C., op. cit., p. 213.
- ④⑪ Prado Jr., op. cit. 山田詔『ブラジル経済史』三〇四—六頁。
- ④⑫ Mwandha, James, John Nicholls and Malcolm Sargent, *Coffee: The International Commodity Agreements*, Gower, Hampshire, England, 1984, pp. 68-9.
- ④⑬ Hexner, op. cit., p. 32.
- ④⑭ ibid., p. 187.
- ④⑮ Delfm Netto, op. cit., pp. 64-6.
- ④⑯ Hallett, Graham, *The Economics of Agricultural Policy*, 1968. 田代洋一訳『農業政策の経済学』農政調査委員会、一九七二年、四—五頁。

